

論文審査の要旨(甲)

申請者領域・分野 氏名	腫瘍制御科学領域顎口腔腫瘍病態学研究分野 氏名 石崎博
指導教授氏名	小林 恒
論文審査担当者	主 査 漆館 聡志 副 査 松原 篤 副 査 中村 和彦
<p>(論文題目) Contributing factors to the development of temporomandibular joint symptoms in a Japanese community-dwelling population (一般地域住民における顎関節症状発現の寄与因子に関する研究)</p>	
<p>(論文審査の要旨)</p> <p>顎関節症の病因に関しては多因子病因説が支持されているが、歯ぎしりの関与以外は明らかではない。そこで2016年度岩木健康増進プロジェクトに参加した1,117名と翌年も連続して参加した827名を対象とし、顎関節症状(関節雑音、開閉口時痛、開口障害)、年齢、性別、BMI、精神心理的要因(SF36、S-WHO-5-J、CES-D)、歯数、歯ぎしりの有無を調査し、顎関節症状との関連性を検討した。</p> <p>統計学的解析は顎関節症状の有無と身体的事項、口腔内環境、精神心理的評価について単変量解析(t検定、χ^2乗検定)とロジスティック回帰分析を、2年連続参加者を対象として顎関節症状の発症に寄与する因子に関してロジスティック回帰分析を行った。</p> <p>2016年度参加者の顎関節症状の出現頻度別では顎関節痛が40人(3.5%)、開口障害が14人(1.3%)、開口時雑音が309人(26.9%)であり、顎関節症状有りは324人(28.2%)であった。年代別の発生頻度では若年者(20~39歳)に出現頻度が高く、加齢と共に減少傾向を認めた。</p> <p>2016年度の顎関節症状発現とその寄与因子に関する単変量解析の結果、年齢(p=0.001)、BMI(p=0.0016)、歯数(p=0.005)、歯ぎしり(p=0.001)、SF36のうち身体機能(PF)(p=0.02)、活力(VT)(p=0.0001)、心の健康(MH)(p=0.03)に有意な関連性を認めた。単変量解析結果より関与が疑われた7項目に加えてCES-DとWHO-5を独立変数としてロジスティック回帰分析を行った結果、年齢(p=0.001)、歯ぎしり(p=0.015)とSF36-VT(p=0.001)に有意な関連性を認めた。</p> <p>縦断研究として顎関節症状を自覚していなかった579人のうち1年後に顎関節症状が出現したのは47人(8%)であり、発現の寄与因子をロジスティック回帰分析したところ寄与因子は歯ぎしりの有無(p=0.037)のみであった。</p> <p>本研究は地域一般住民対象の大規模調査にて、顎関節症状発症における最も有力な寄与因子が従来の報告と同様に歯ぎしりであることを横断・縦断研究のいずれにおいても明らかにするとともに、精神的因子の関与も否定できないと推察した初めての報告である。</p> <p>以上より、本研究は学位授与に値する。</p>	
公表雑誌等名	Oral Science International に受理(2019年11月)